

---

**■ PCN だより**

## PCN Volume 62, Number 4 の紹介 (その 1)

2008年8月発行のPCN Vol. 62, No 4には Regular Article 13本, Short Communication 3本, Letter to the Editor 5本が掲載されている。この中から外国からの Regular Article 7本, Short Communication 1本の内容を紹介する。

### Regular Article

1. Alexithymia and temperament and character model of personality in alcohol-dependent Turkish men

*Cuneyt Evren, Samet Kose, Kemal Sayar, Basak Ozelik, Jeffrey P Borckardt, Jon D Elhai, Robert Cloninger*

トルコ人のアルコール依存男性におけるアレキシチミアと性格について

アレキシチミア(失感情[言語]症)は、自分の感情に気づいて言語的に表現することができない状態をいうが、人格構造としてよりも心身症を来しやすい状態として理解されてきた。そこで本研究ではトルコ人のアルコール依存症男性入院患者111名についてアレキシチミアの頻度とクローニンジャーの人格モデルとを評価した。アレキシチミアの評価にはToronto Alexithymia Scale (TAS-20)のトルコ語版を、人格構造についてはTemperament and Character Inventory (TCI)のトルコ語版を使用した。

TAS-20得点は、harm-avoidanceとself-transcendenceとに正の相関がみられ、self-directednessとcooperativenessとは負の相関がみられた。回帰分析の結果から、harm-avoidanceおよびself-transcendenceの高得点とself-dir-

ectednessの低得点とは、アレキシチミアを予想することが示された。このことから、トルコ人のアルコール依存症男性について、アレキシチミアは、クローニンジャーの生物学的な人格モデルの中の因子により説明できることが示唆されたとしている。

2. Depression and its association with self-esteem, family, peer and school factors in a population of 9,586 adolescents in southern Taiwan

*Huang-Chi Li, Tze-Chun Tang, Ju-Yu Yen, Chi-Fen Huang, Shu-Chun Liu, Chih-Hung Ko, Cheng-Fang Yen*

台湾南部の一般青年における抑うつと自尊心、家族、仲間、学校との相関について

本研究は、台湾の青年期一般人口について、抑うつの有病率に、自尊心、家族、仲間、学校などの因子が与える影響を調べたものである。

学生12,210名を調査し、Center for Epidemiological Studies' Depression Scale (CES-D)で28点より高いものを抑うつ群とした。Rosenberg Self-Esteem Scale (RSES), Adolescent Family and Social Life Questionnaire (AFSLQ), Family APGAR Index (APGAR)にて、それぞれ自尊心、家族、仲間と学校の因子を評価した。結果はt-テストとChi二乗法により検定し、さらに回帰分析にて検討した。

有効回答率は86.3%であり、9,586名について解析したが、抑うつの有病率は12.3%であっ

た。抑うつリスクとしては、女性、高年齢、都市部の居住、低い自尊心、両親の離婚、低収入、家族内葛藤、低い家族機能、仲間との関係への不満足、低い学校へのつながり、低い学業成績があげられた。性、年齢、居住地を補正した後では、低い自尊心、高い家族内葛藤、低い家族機能、不満足な仲間との関係、低い学校とのつながりが、抑うつリスクであった。台湾の青年期一般人口では抑うつの頻度が高いことが知られているが、低い自尊心に加えて家族、仲間、学校などの要因が関与していることが示されており、これらの要因を検討することは、抑うつの予防に役立つものと考えられる。

3. Relationship of attention-deficit/hyperactivity disorder symptoms, depressive/anxiety symptoms, and life quality in young male adults  
*Che-Yi-Chao, Susan SF Gau, Wei-Chung Mao, Jia-Fwu Shyu, Yi-Chyan Chen, Chin-Bin The*

#### 成人男性における ADHD 症状と抑うつ/不安症状と QOL との関係について

成人における ADHD は、他の精神疾患症状と紛らわしいこともあり、見逃され易い疾患といえる。本研究では、ADHD 症状、不安/抑うつ症状、QOL を若齢成人男性において調査した。

台湾軍への徴兵時に記入された 929 名の adult ADHD Self-Report Scale (ASRS), WHO Quality of Life Brief Version (WHOQOL-BREF), Epworth Sleepiness Scale (ESS), Beck Depression Inventory 第二版 (BDI-II), Beck Anxiety Scale (BAI) を施行しその解析をした。ASRS 得点から 328 名 (35.3%) が ADHD に分類されたが、そのうち 65 名 (7.0%) は確実例、263 名 (28.3%) は疑い例とされた。そして、328 名の ADHD 群は、非 ADHD 群と比較して、より強い抑うつ症状、不安症状、日中の眠気、低い QOL を示していた。このことから、抑うつ症状、不安症状、日中の眠気、低い QOL を呈する若齢成人においては、ADHD を鑑

別診断の一つとして考慮する必要があることが示唆された。

4. Effect of organizational strategy on visual memory in patients with schizophrenia  
*Myung-Sun Kim, Yoon Namgoong, Tak Youn*

#### 統合失調症患者における空間記憶の統合方法について

Rey-Osterrieth Complex Figure Test (ROCF) を用いて、統合失調症患者の空間記憶における近時記憶再生にどのような方法がとられているかを調べた。ROCF の評価は Boston Qualitative Scoring System (BQSS) により、20 名の統合失調症患者と年齢・性別を合わせた 20 名の健常者について検討した。統合失調症群と健常群とは、模写条件では fragmentation に違いがあり、近時再生条件では configural presence and planning に違いがあり、遅延再生条件では configural presence, cluster presence/ placement, detail presence/ placement, fragmentation, planning, neatness において質的な差異が認められた。また、両群間では、immediate presence and accuracy, immediate retention, delayed retention, organization の項目において量的な差異が認められた。模写条件において両群間で organizational strategy において違いがあり、immediate recall における差異として認められたものと考えられる。これらの結果は、統合失調症患者においては空間の統合障害のために個々の図形に対応するような方策に頼らざるを得ないことにより、空間記憶の障害が認められることを示唆している。

5. Depression symptoms and olfactory function in older adults  
*Anna Scinska, Elizbieth Wrobel, Agnieszka Korkosz, Pawel Zatorski, Halina Sienkiewicz-Jarosz, Wanda Lojkowska, Lukasz Swiecicki, Wojciech Kukwa*

### 高齢者における抑うつ症状と嗅覚機能

脳機能画像では、嗅覚と気分とに關与する脳皮質領域にオーバーラップが示されている。本研究では、高齢者（53～79歳）についての15項目 Geriatric Depression Scale (GDS) による抑うつ症状の評価と Sniffin' Sticks による嗅覚機能の評価との相関について検討した。また、味覚についても舌前部における electrogustometry にて評価した。

GDS 得点は、嗅覚閾値、あるいは、嗅覚同定能力について相関を示さなかった。同様に GDS 得点と味覚閾値との間にも相関を認めなかった。GDS 得点が5点以上を抑うつ群（25名）とし、4点以下を非抑うつ群（60名）として比較したが、嗅覚閾値、味覚閾値いずれにも差異を認めなかった。この結果からは、高齢者において抑うつ症状は粗大な嗅覚障害とは相関していないことが示唆される。

6. Restless legs symptoms with sleepiness in relation to mortality; a 20-year follow-up study of a middle-aged Swedish population  
*Lena Mallon, Jan-Erik Broman, Jerker Hetta*

### 眠気を伴うむずむず脚症候と死亡率；スウェーデン中年人口における20年間の追跡調査から

本研究では、中年一般人口において日中眠気を伴うむずむず脚症候が死亡率に影響するかどうかを調査した。1983年にスウェーデン中部で郵便法により30～65歳の一般人口5102名について調査した。質問紙では、むずむず脚症候、日中眠気、背景、ライフスタイル、睡眠習慣、医学的状态、抑うつを調査した。一方、1983～2003年の死亡データを調査したところ、追跡期間中に657名の死亡が確認された。

日中眠気を伴うむずむず脚症候は10.3%に認められ、短い夜間睡眠、複数の健康上の問題点、抑うつと相関していた。追跡調査期間に、男性379名、女性278名の死亡が確認されたが、年齢、短い夜間睡眠、ライフスタイル、医学的状态、抑

うつを補正した後で、日中眠気を伴うむずむず脚症候を呈していた女性については、有意に高い死亡率が示された（HR 1.85; 95% confidence interval 1.20-2.85;  $p=0.005$ ）。しかしながら男性についてはこのような有意差は認められなかった。

7. Validation of the Chinese version of the mood disorder questionnaire in a psychiatric population in Hong Kong  
*Ka-Fai Chung, Kwok-Chu Tso, Erik Cheung, Michael Wong*

### 香港の精神障害者における Mood Disorder Questionnaire 中国語版の妥当性の検討

香港の精神科外来患者に対して Mood Disorder Questionnaire (MDQ) 中国語版が、双極性障害のスクリーニングに有用かどうかを検討した。外来にて気分障害とされている患者185名に中国語版 MDQ を記入してもらい解析した。平均年齢43.0歳、女性65.9%であった。そのうちランダムに選択した102名について電話による Structured Clinical Interview for DSM-4 (SCID) を行った。その結果、62名（60.8%）は双極性障害（双極性I型が48名、双極性II型が9名、特定不能の双極性障害が5名）、35名（34.3%）はうつ病性障害、1名（1.0%）は物質依存性障害という結果であった。

中国語版 MDQ の内的整合性について、そのクロンバック係数は0.82であった。因子分析により、energized-activity 因子と irritability-racing thoughts 因子とが抽出され、これらは全体の47.2%を説明していた。躁病に対するカットオフ値は7点であり、この場合の感度は0.73、特異度は0.88であった。このような結果から中国語版 MDQ は精神科診療場面において双極性障害のスクリーニングに有用であることが示唆された。

**Short Communication**

1. Restless legs syndrome and its relationship with insomnia symptoms and daytime distress —an epidemiological survey in Sweden

*Jan-Erik Broman, Lena Mallon, Jerker Hetta*

**むずむず脚症候群と不眠・日中の苦痛について  
——スウェーデンにおける疫学調査の結果から**

不眠の訴えと日中の苦痛の訴えを手掛かりとして、むずむず脚症候群の頻度を調べるために、ス

ウェーデン、ウプサラの地区住民 1962 名にアンケートを実施した。質問項目は、睡眠、日中の苦痛、International RLS Study Group により規定された標準的な 4 項目であった。回答者のうち 18.8% がむずむず脚症候群と診断された。頻度についての質問では、5.8% が頻回であると回答しており、不眠と日中の苦痛は、むずむず脚症候群に有意に多く認められた。

(文責：武田雅俊 PCN 編集委員長)